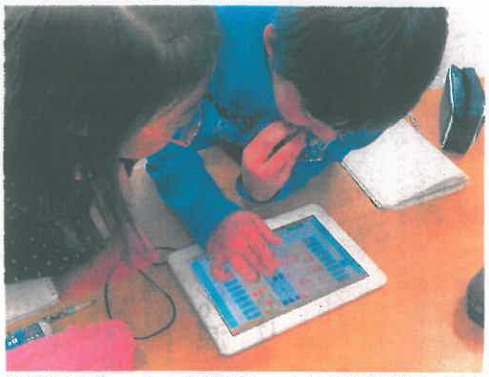
日刊水産経済新聞
2016（平成28）年2月22日（月曜日）

知りたいを引き出せ！

専用ソフトで〝深掘り学習〟


生徒のタブレットへの順応は、大人が思う以上に早い

気仙沼の魚を学校給食に普及させる会

海浜地域の小学校では総合的な学習の時間を使い、地域産業に理解を深めようと、地元漁業者や水産加工業者らを招き、あるいは職場を往訪する事例が増えてきた。水産業への理解や魚食普及に好材料だが、いざ教壇に立ち、生徒の気を引くのは至難の業だ。「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」は、専用の学習ソフトを開発し、タブレット端末を教科書代わりとすることで、水産への学習意欲を高めている。

うおーく魚食にっぽん vol.61

さかなで元気!!プロジェクト

学習ソフトのコンテンツは、一問一答形式でつづるのではなく、情報を小出しに、ただし連続性をもたせるため、リンク機能を縦横無尽に張り巡らせた。ちょっとしたゲーム感覚で始めても、多くの絵や写真とともに付加情報が提示され、自然に知識を増やせる。「知りたい」と思った内容を特化し、自分のペースで知識を深掘りできる点で、紙やパワーポイントの教材と大きく異なる。

専用ソフト画面の一例

例えば「食にたずさわる人」を知ろうとした時、最初の画面で漁業に始まり、幾多の産業を経て提供される過程が分かる。漁業に興味をもったら、「気仙沼の漁師さん」をタッチすれば、当地の主要漁業種が表示され、さらに沿岸・沖合・遠洋漁業と、各項目の詳細も示するほか、動画サイトとも連携をもたせた。

気仙沼発信だけに、マグロに関する情報は多い。ソフト内だけでなく、専門の外部ホームページともリンク機能をもたせており、関心度に応じてより高度に、多くの情報が閲覧できる流れとした。

実際の授業で、「なぜ気仙沼は水産業が重要なのか」と問えば、生徒たちはタブレット端末をタッチしてすぐ答えを見つける。タブレットは直感的に操作しやすいため、「5分もあれば自在に操作する」そうだ。

同会担当者は、タブレットを使うメリットとして、「『調べ学習』もできること」と挙げる。数々の専門サイトとのリンクに、インターネット検索も併用することで、「興味がある情報を自分たちでどんどん調べて、水産業に関する知識を深掘りしてほしい」と話す。

プロ登場で授業に厚み

コンテンツはWEBでも公開されている。漁師になりたい人は？」と問うと、3人の生徒が手を挙げた。東北の子供たちは控えめというが、この日は漁労長の思いが確かに届いた。

同会は各界のプロの話を聞いたあと、タブレット端末を用いた授業へと進めることで、学習意欲を効果的に高めている。

漁師さんのリアリティーある経験談はコンテンツで表しきれない強みだ

地方から日本を元気に

「気仙沼の魚を学校給食に普及させる会」の臼井壮太朗会長（臼福本店社長）は、東日本大震災を経験し、エネルギー・食・人のつながりの大切さを痛感したという。活動には子供たちへ、「世界に誇る素晴らしい産業が地元にある」「食に携わる仕事を知り、食に感謝する気持ちを育み、水産業の応援団になってほしい」との思いを込めた。

取り組みは復興庁の「新しい東北」先導モデル事業に選ばれており、ソフトを共同開発した富士通など、幅広い分野から協力を得ている。「今後も産官学の連携を推進し、国産食材に対する意識向上につなげたい。地方の活性化は、日本全体の活性化につながるはずだ」（臼井会長）。